

令和7年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書 兼 アンケート

参加会議： 第8回会議(経済学関連分野)

所属機関・部局・職名： University College London (UCL)

氏名： 立石 泰佳

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

最も印象に残ったのは、最終日に Simon Johnson 教授、Paul Romer 教授、Guido Imbens 教授が登場した、「制度と開発」に関するパネルセッションである。このセッションでは、Johnson 教授が昨年ノーベル賞を受賞した論文をもとに、政府機能や制度がどのように経済発展に結びつくかについて議論がなされた。これは私の研究対象と最も近いテーマであり、特に「現在の先進国の発展がこれまでにたどった道筋と、発展途上国がたどる道筋の違い」という観点から興味深く聞くことができた。

また、各ノーベル賞受賞者の講演に共通していたのは、受賞対象となった研究を振り返るのではなく、現在取り組んでいる研究を語る姿勢である。気候変動や AI といった新たな課題へと議論を広げる研究者が多かった点が印象的であった。その中でも特に興味深かったのは、Christopher Pissarides 教授の講演で、AI の普及が労働市場における必要スキルをどのように変化させるかという議題であった。私自身の研究では、外国企業が途上国に進出した場合に労働市場へ与える影響を分析している。AI のスキルが外国企業を通じて途上国に普及する可能性を踏まえると、労働者間の格差拡大という問題と密接に結びつくことが考えられることに思い至った。他の受賞者の講演についても、私の研究とは直接関連しないテーマが多かったが、それらを自身の関心と結びつけて考えることで新たな視点を獲得することができた。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やエクスカッション等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

昼食の場で Simon Johnson 教授 とお話しする機会があった。昨年ノーベル賞を受賞したばかりであり、その知らせを受けたときのエピソードを気さくに語っていたのが印象的であった。また、研究を効率的に進めるために日課として運動を欠かさないこと、研究以外の読書も日常的に行っていることを紹介していた(特に SF 小説が好きで、昼食参加者一人ひとりに好きな本を尋ねていた)。さらに、IMF チーフエコノミストやバイデン政権の transition team に参加した経験についても話が及び、私自身が世界銀行でコンサルタントとして働いた経験と重ね合わせ、政策と研究の関係やアカデミア人材の活用について示唆を得ることができた。

Christopher Pissarides 教授 とは、少人数形式の open exchange にて議論する機会を得た。非常に柔和な人柄で、多くの質問に真摯に答えていたのが印象的であった。主に AI 導入後の労働市場の展望について語っていた。特に印象に残ったのは、ヨーロッパの学生がトップレベルの業績をあげるにはどうすべきかという問いへの答えである。他のノーベル賞受賞者がアメリカで教育を受け、就職している中で、Pissarides 教授だけはイギリスでキャリアを築いている。経済学を学ぶのであればアメリカに行くのが最善であるとしつつも、ヨーロッパでは研究予算や大学ネットワークが国ごとに分断されており、この fragmentation が大きな課題であると指摘していて、イギリスで PhD をしている身としても考えさせられるテーマであった。

Josh Angrist 教授とは夕食のテーブルを共にした。席が少し離れていたため直接の対話は限られたが、各大学の PhD プログラムの違いや MIT における教育の特徴について話されていた。Angrist 教授は因果推論の手法でノーベル賞を受賞しているが、労働経済の授業も担当しており、同分野では豊富なデータの活用可能性があると強調していた。私は開発経済学を専攻し、途上国におけるデータの質の低さや自らの調査によるデータ収集に直面しているが、労働関連のデータも有効に活用できることを改めて認識し、データの質と手法のバランスについて考える良い機会となった。

直接会話する機会にはなかったが、Robert Aumann 教授が 95 歳にしてなお講演やディスカッションで明晰な発言をし、さらに夕食の場では参加者と共に踊っていた姿は強く印象に残った。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

既知の参加者はほとんどいない状態で会議に臨んだが、実際に交流してみると共通の知人を持つ人が多く、経済学 PhD の世界の狭さを改めて実感した。特にデンマーク、スウェーデン、ドイツの研究機関に所属する学生やポスドク、教員と話す機会があり、自身の研究テーマを紹介したところ関心を示してもらえた。印象的だったのは、アメリカのトップスクールの PhD 学生が既にノーベル賞受賞者と面識があり、ファーストネームで呼び合い気さくに交流していた点である。

また、自分の研究プロジェクトの一つと非常に近いテーマを Next Gen Session で発表している参加者がいたため声をかけ、私自身の研究内容を紹介したところ、分析手法に関する助言や私の知らなかった関連文献を教えてもらうことができた。さらに、開発経済を専攻する参加者は少なかったものの、コーヒープレイクなどで親しくなった人との会話の中で、私がアクセス可能なデータに興味を持つ人もおり、将来的に共同研究に取り組む可能性について声をかけてもらった。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

日本からの参加者とは、会議前に Zoom で顔合わせを行っていたため、事前に互いのプロフィールや専門分野を把握することができた。そのため、リンダウ到着時には交通手段などスムーズに情報交換を行うことができた。加えて、3名とも同じホテルに宿泊しており、会場から距離があったため、行き帰りのバスの中で自然と話す機会が多くあった。

私以外の 2 名は日本で博士課程に進学しており、学部卒業以降ほとんど海外に滞在している私にとって、日本の博士課程のカリキュラムや就職状況、学会の様子など、これまで直接知る機会がなかった話を伺うことができたのは大変興味深かった。

5. 特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。

Laureate Lunch : ノーベル賞受賞者を 10 名の Young Scientist が囲む形式で、フランクに交流できた点が非常に良かった。私は Simon Johnson 教授との昼食を選び、とても活発な議論を楽しんだ。

Open Exchange : 少人数でノーベル賞受賞者とディスカッションできる形式であり、私は Robert Aumann 教授 と Christopher Pissarides 教授 のセッションにそれぞれ参加した。研究に関する専門的な議論にとどまらず、時事問題に対する見解など幅広い話題に触れることができ、大変興味深かった。

Next Gen Science : Young Scientist が 1 人あたり 6 分間で研究を発表し、続いて 3 分間の Q&A が行われるプログラムである。私は発表しなかったが、他の参加者が短時間に内容を整理して分かりやすく伝えるスキルは非常に参考になった。また、自分の研究に近いテーマを扱っている参加者を見つけることができ、今後の研究交流の可能性を広げる契機となった。

6. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット[具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。]

最も有益であったのは、他の参加者との交流である。様々な国からの参加者と議論する中で、関心の近い研究者からは自分の研究に対する助言を得られたほか、共同研究の可能性について具体的に話す機会もあった。こうした交流を通じて、今後の研究活動において国際的なネットワークを活用できる展望を得ることができた。

ノーベル賞受賞者とは、昼食・夕食・Open Exchange などで話す機会が設けられていたが、参加者が多いため 2~3 回程度のやり取りにとどまった。それでも、Joshua Angrist 教授 や Simon Johnson 教授 からは、私が 10 月から Harvard 大学に visiting student として滞在することを伝えたところ、「自身の授業を聴講するとよい」との言ってもらえたのは大きな収穫であった。

7. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

今回の交流を通じて得られた知見は、今後の研究活動に積極的に取り入れ、成果として形にしたうえで、日本国内の学会や研究会で発表することで広く共有していきたいと考えている。リンダウ会議では、ノーベル賞受賞者の研究に対する姿勢や、国際的な議論の最前線に直接触れることができた。このような経験を単なる個人的な学びにとどめるのではなく、研究成果を通して日本国内の研究コミュニティに還元することを目指したい。

また、会議を通じて築いた多様な国際的ネットワークを継続的に維持し、日本の若手研究者が海外の研究者と交流しやすい環境づくりに貢献したいと考えている。業績が少ない若手研究者だと研究関心の近い相手を探すことは容易ではないが、今回得られた人脈を橋渡しとして活用することで、海外との接点を広げる後押しをしたい。

8. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ

セミナーや講演などでノーベル賞受賞者と個別に会う機会は他にもあるかもしれないが、これほど多数の受賞者が一堂に会するのはリンダウ会議ならではの貴重な経験だと感じた。また、ノーベル賞受賞者自身も Young Scientist との交流を楽しみにしているため、気さくに話しかけられる雰囲気がある。ただし、インフォーマルに会話できる機会は限られており、事前に話したいトピックや質問を準備しておく、物怖じせずに積極的に質問できるのではないかと考えた。

さらに、諸外国から集まった多様な分野の参加者と交流できることも、ネットワーク形成の観点から大きな魅力である。朝から夜までイベントが続き目まぐるしい日々となるため、参加前に研究スケジュールにある程度区切りをつけておくことを強く勧めたい。

(以上の記載内容は、氏名と併せて日本学術振興会ウェブサイトに掲載されます。)